
P & P (仮題)

木戸・山茶花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P & P (仮題)

【Nコード】

N 4 6 7 9 Y

【作者名】

木戸・山茶花

【あらすじ】

個人能力対策室に所属する武藤力也のは、日々、違法能力者の対応に追われている。

一仕事終えた翌日、人がバラバラにされるという事件が起きた。

力也は、対策室長の娘レナと、探索班マリナの協力のもとに、事件を解決する。

(前書き)

習作

湿った風が吹く夜、武藤力也はビルの屋上で星を眺めていた。

星に興味があるわけではない。単なる暇つぶしだ。ビルの下は、繁華街のネオンと、人の音がうるさい。なので、反対に空を見上げていただけだ。

学生服の冬服は、まだ十月の気候に馴染んでいない。湿気があるためか、力也の額には、うっすらと汗が浮いていた。上着を脱ぎたがったが、仕事の連絡は、いつ来るかわからない。対弾・対刃繊維で作られた特注品だ。仕事の最中は着っぱなしというのが、ルールである。

力也の命を守るための当然の措置ながら、しかし、どうせなら同じ繊維でワイシャツを作ってくれないかとも思う。ワイシャツならば、まだ涼しいだろうに。

ガ克兰の襟元を緩めながら、力也は息を吐く。熱っぽい。仕事には慣れてきたつもりだが、緊張しているのかもしれない。

ポケットから、グローブを取り出した。これもまた、特殊繊維で作られた一品だ。表側は、合金で作られたプレートで、鱗のように覆われている。

まだ連絡はこないが、先にグローブをはめておいた。高ぶる心を少しでも抑えようとしたのだが、逆に仕事を意識するはめとなる。逆効果だった。

まだかまだかと、星を見ながら、連絡を待つ。知識のない頭では、夜空を見上げても、星座など分からない。視線を投げる先として、心地よいくらいだ。

しばらく風に吹かれていると、内ポケットからコール音が響いた。すぐさま携帯電話を取り出し、出る。

『東郷だ』

電話の相手は、重苦しい声で名乗った。上司だ。

『“目標”を発見した。君のいる場所から、東に二本目の通りを移動中だ。確保を頼む』

「了解です」

『相手の“能力”は把握しているかね?』

「えーっと、好きなところに火を出せる、でしたよね?」

『任意の空間に着火させる、だな。効果範囲はそれほどでもないが、周りに被害が及ぶ可能性もある。慎重に、迅速に頼む』

「了解っす」

力也は、二つ折りの携帯電話をしまうと、首に手を当てた。

そこには、透明な輪があった。首輪だ。チョーカーのようにピツタリとはまっていた。

指で弾くと、ガラスのような音がする。澄んだ音色だ。しかし、鳴らした当人は、それを綺麗とも思わず、ビルの屋上を駆け出した。一步、二歩で屋上のヘリへと足をかけ、跳躍。三步目は、二十メートルは離れているであろう、向かいのビルについていた。

さらにそのビルの屋上も、四歩で駆け抜ける。次は跳ばず、五歩目を空中に出した。

そのまま落下。足下に人影が見えたので、ビルの壁面を蹴って、着地点を調整する。

調整の最中に、東郷が言った“目標”を確認した。

追われているわけでもないのに、逃げるように走る男。予め伝えられていた通り、歳は二十代の半ばか。革ジャンとジーパンを着た、どこにでもいそうな男だ。

だが、“目標”だ。

力也は、突然の登場に驚く周囲を一切無視して、男へと向かった。まだ九時過ぎ。人数は多い。隙間を縫うようにして、追いかける。さらには、

「APPだ! 一般人はこの場から離れてろ!」

周囲がざわめいた。悲鳴をあげ、逃げようとする者もいる。混乱は伝播し、力也を中心として、人が引いていった。

その中、“目標”たる男は、こちらを見て顔を引きつらせていた。逃げるならそのまま走ればいいだろうに、お約束な反応で助かる。力也は大きな一步を踏み込み、男へと飛び掛った。

男が、対抗するように手の平を向けてきた。東郷の言っていた、“能力”を使うつもりだろう。

だが、力也の速さは、能力など使わせる間もなく、男の腕を取ったさらに後ろへ回りこみ、腕を掴み上げる。

「なっ、がっ！」

痛みに、男が呻いた。が、構わず力也は腕を絞り上げ、

「ぐぎゃっ！」

折った。さらに、もう一本の腕を掴み、背に蹴りを入れて、地面に押し倒す。

その際、相手は顔面を強く打ったようだったが、気にしなかった。能力の違法使用者には、厳罰が下る。腕を折られ、顔面を潰されるなど序の口だ。

「動くな。もう一本も折られたいか？」

「がぐっ」

まともに返事もできないようだった。意識が飛んでいる。

ならばそれをチャンスとして、力也はズボンのポケットから、一枚のプレートを取り出した。透明な、白い円形の板だ。

手の平大のそれを、男の、折れた腕へと押し付ける。するとプレートは粘体のように蠢き、男の腕にくるりと巻きついた。腕輪になった。

白が透明になるのを確認して、力也は息を吐く。先ほどとは違う、安堵の吐息だ。まだ油断はできない、と頭では理解していても、零さずにはいられない吐息だった。

男は動かない。

力也は携帯電話を取りだし、リダイヤル。相手は一コールで出た。『東郷だ』

かけてきたときと、全く同じ反応である。

「武藤です。”目標”の確保、完了しました」

『了解した。回収班を向かわせる。それまで、”目標”を確保しつつ、待機したまえ。回収が終わったら、今日は撤収していい』

有無を言わず、電話は切れた。回収班がくるまで、五分といったところか。

力也は、体の中に残る熱を吐き出すように、大きく息をする。

元より暑かったが、今の一瞬で、一気に体温が上がったような気がする。

どかりと、男の上に座り込む。椅子としては具合が悪かったが、立ちっぱなしというのも面倒だった。

男の低いうめき声を聞きながら、力也は再び空を見上げた。

力也を恐れて、既に人はいない。ネオンは相変わらずだが、星たちも負けじと輝いていた。

その中に、一つ、大きなものがある。

天を貫くように、空を切裂くようにそびえ立つ、白い、一本の柱だ。

レリクスと呼ばれるそれは、話によれば、成層圏まで伸びているらしい。

二十世紀始め、正確には1901年の一月一日に現われたと、歴史の教師は説明していた。それ以降、人類全体が、不思議な力に目覚め、今日に至ると。

世界中の都市に生えたというレリクスは、当然のように、国際問題に発展した。そこから先は説明が長ったらしくて、力也はあまり覚えていない。

とりあえずは、目先の問題だ。遠くからやってくる、回収班らしき人影に手を上げて合図しつつ、力也はもう片方の手で、自分の首輪をなでた。

回収班と、自分の違い。首輪の有無、腕輪の有無。

力也にとっては瑣末な問題だが、世界規模での大問題である、個人の特殊能力。

腕輪によって封じられ、首輪によって制御される能力は、百年経っても未だに世界を揺るがしている。

レリクスが現れて以降、人類全体が不思議な力に目覚めた。

それは、老若男女の区別無く、生まれたばかりの赤ん坊でも、死ぬ直前の老人にでもつかうことができる。

誰にでも使え、しかし誰しもが同じではない力は、そのまま個人能力と呼ばれた。知力や筋力といった区分と、全く一緒くたにされている。

違うのは、生まれた瞬間に、その力が封じられるということだ。人類が編み出した個人能力への答え。それは封印だった。

今まで使えなかったものが使えるようになった。しかし、それが国際問題となり、戦争にまで利用されるとなると、人は力の発現を手放しには喜べなかった。

第一次世界大戦で力は猛威を振るい、ベルサイユ講和条約にて、世界的に封印が決まった。

それでも、力を求める者はいる。

第二次世界大戦を経て、未だなお、悪用する者が絶えない。

どうしてか、腕輪を破壊して、能力を使おうとする者がいる。能力の解放を訴える団体もいる。

それゆえに、能力への対策も必要となる。

首輪を付けられ、狗と呼ばれ、それでも世界の均衡に尽力する者たちがいる。

仕事の翌日、朝早くから、力也は事務所に呼ばれていた。

総理大臣直轄、個人能力対策室、それが力也の所属にして、仕事

場だ。

力也の担当は、最前線にて、”目標”たる違法能力使用者を捕らえること。手段を選ばず、という前置き付きで。

その力也が仕事翌日に呼ばれるのは、珍しくない。日本は、世界で有数の、個人能力犯罪大国である。これは、第二次世界大戦にて個人能力の戦争利用を推奨したため、国としての能力者保有数を少なく縛られているからである。つまりは、人手不足だ。

力也を呼んだのは、昨晚も会話した上司、東郷三郎だった。初老の紳士、と言えば聞こえはいいが、以前は前線にて”目標”確保を任務としていた猛者でもある。

かちりと固められたオールバック。その下にある眼差しは厳しく、慣れていなければその視線に射抜かれただけで恐縮してしまう。力也も慣れてきた方ではあるが、まだ居心地が悪い。

力也の気持ちを知ってか知らずか、東郷は事務的に、仕事の話を切りだした。

「昨晚、十一時過ぎ、違法能力者らしき存在が確認された。場所は、近くだ。K区T、Lショッピングモールにて」

ざつと言い、東郷は資料を取り出した。室長の大きな机に、写真がまかれる。

「うげ」

と、呻かずにはいられない、凄惨なものばかりだった。オブライトに包んで言うなら、人間の細切れ死体か。

見事、というか、ここまでやるかと言いたくなるくらいにバラバラだった。それこそ、指先の一本一本まで、綺麗に切断されている。すっぱりと、という表現がぴったりだ。既存の刃物では無理と、鑑識知識のない力也でも分かった。

「犠牲者は女性、身元の確認は警察がやっている。……大丈夫かね？」

「ええ、まあ、コレ見て楽しくなるような趣味は無いので」
気分が悪くなってきたので、写真から目をそらした。しばらく肉

は食いたくない。

「君の任務は、いつも通り”目標”の確保だ。手段と、“目標”の状態は問わない」

「いつも通りですね」

「ああ。違法能力者には死を。それが国際ルールだ。腕の一、二本引きちぎっても構わんよ」

東郷が言い、力也の様子を見て咳払いをした。冗談のつもりだったに違いない。ウケなかったのが、少し残念そうだった。とはいえ、実際に腕くらい引きちぎれる力也には冗談にすらならないのだが。

「人目につく場所での犯行だ。おそらく、”目標”は能力の使い方に慣れていないだろう」

「逆に面倒なケースですね」

能力の使い方に慣れていない者は、いつ暴走して周りを巻き込むとも限らない。もしかしたら、二人目、三人目の犠牲者が出ているかもしれない。

東郷は平然と、力也は眉をしかめ、話を続ける。

「うむ。観測班に探らせてはいるが、あちらも手一杯だ。百人単位の順番待ちを、寝て待つわけにもいかない」

個人能力犯罪大国の名は伊達ではない。力也以外にも対策室所属の能力者はいるが、いつでも人手が足りていない。だというのに、能力関係の犯罪は増える一方である。どこかの国と比べればマシなほうだが。

「お隣さんは、一万人待ちでしたっけ。それに比べりゃ、ですけどね」

「うむ、慰めにもならない。幸か不幸か、現場は近い。君には、足で探ってもらおうと思っている」

「了解です」

これも、いつものことだ。力也は、歳のことであって、まだ下っ端。逆に言えば、動きやすい立場でもある。

筋力増強という力也の能力は、格闘戦以外でも役に立つ。地味な

所、ではあるが、ずっといい。

「“目標”の見た目とかは、分かってるんですかね？」

尋ねると、東郷は頷いた。が、答えは、力也の予想を超えていた。「第一発見者を、警察から譲り受けた。彼女を連れて行ってくれ」

「は？ 一般人を巻き込むんですか？」

さすがにそれはないだろう、と抗議するが、東郷は今度は首を横に振った。

「一般人ではなくてね。そろそろ着く頃だと思うが」

「え？」

力也が疑問の声を上げると同時に、事務所の扉が開かれた。

振り返ると、人影がある。

金髪碧眼。絵に描いたような欧州系美人。長い金髪が特徴的で、腰まである。眠たそうな眼は、朝だからだろうか。が、力也を驚かせたのは、彼女の美しさではなかった。

「レナ……」

知り合いである。しかも、力也の家の、お隣さんであった。

さらには、

「彼女が、私の娘が、ちょうど居合わせたらしい。第一発見者だ」

東郷三郎の娘、東郷レナであった。

どう見ても日本人な東郷の娘であるのは、義理の関係だからと、いつか聞いたことがある。深くは聞いていないが、訳ありだとは悟っていた。

それにしてもまさか、東郷の娘が第一発見者とは。

「友人らと買い物に行っていたらしくてね。その友人も発見者だが、娘の方が、使いやすいだろう。顔見知りでもあるからな、君とは」

武藤家と東郷家は家ぐるみの付き合いがある。実は、東郷とはプライベートで娘について相談を受けるくらいでもあるのだが、それはさておき。

「いいんすか？」

と、聞かずにはいられない。義理の関係とはいえ、東郷が娘のこ

とを普通の親以上に気に掛けていることは、力也も知っていた。最近娘と食事をする時間がなくて、と愚痴られたのは、一昨日だったか。

東郷は、やや声のトーンを落としてはいたが、肯定した。

「人命に関わる。やむを得ないと思っている」

言うのは、仕事としても親としてもだろう。こういわれてしまえば、力也には拒否のしようがない。

「了解です。んじゃ、早速ですかね？」

「ああ。警察の見立てでは、まだ近くに潜伏しているようだ。もしかすれば、レナを見て反応するかもしれない」

「情報ついでに文句も貰ってそうっすねえ」

「軋轢など、慣れたものだ。君が気にする必要は無い。そういうのは、全て私がやる」

「それじゃ、俺は俺にできることをやって、東郷さ……、室長の心労を減らしますよ」

「ああ、期待している。頼んだぞ」

話は終わり、と東郷は執務机に戻る。力也はすぐさま扉の外だ。

レナとは、それなりに面識もある。考えているであろうことも、少しは分かるつもりだ。

「……」

この無言、すぐ後に出る言葉はおそらく、

「めんどくさい」

で、合っていた。

レナはとにかく無気力だ。何かしらやるにしても、この一言なしには始まらない。

東郷は娘なので使いやすいつたが、果たして、どこまで本気だったか。このレナのくせは、東郷悩みの種の一つである。

「そう言う……のも分かるけどなあ」

もっとも、この場合、一般人が思うのは、面倒云々ではなく、怖い、であろうが。

一般人は、腕輪によって、個人の能力を封印されている。能力が使える者相手には、普通ならば恐怖を抱くものであるが、レナは優先順位がちと違うらしい。

「すぐ終わる？」

眠たそうな眼は、実は眠いのではなく、だるいのだろう。

「相手がすぐ出てきてくれりゃあな。速攻でぶちのめすんだけど」
「……出てこなかったら？」

「出てくるまでぶらぶらすっきゃねえなあ」

レナが、あからさまに肩を落とした。力也は苦笑を返すしかない。
「まあ、とりあえず行かなきゃ始まらねえし、頼むわ」

「んー……」

拒否とも肯定とも取れる曖昧な頷きかただった。

力也は苦笑を深くしながら、レナの手を引き、事務所を出た。

K区Tまでは、電車ではなく、タクシーを使った。

電車を使っても良かったが、万が一があれば大惨事になる。可能性はとても低かったが、力也も一応、用心を怠らなかった。

到着して、まず向かったのは、ショッピングモールだ。まさか馬鹿正直に”目標”が現れるとも思わないが、念のため、である。

ショッピングモールは、当然、封鎖されていた。警官が周囲に立ち入り禁止のテープを張っている。力也は、それを気にせず越えた。見回っていた警官に呼び止められたが、力也が首を指差すと、不満げながらに下がっていく。力也の首輪は、それだけで身分証明書のようなものだ。

首輪も腕輪も、レリクスの破片から作られる。その違いについて、力也はよく知らない。専門家レベルでも不明な点が多いらしい。知ってもどうしようもない、というのが、力也の楽観だった。

現場へと向かう。さすがに遺体は片付けられていたが、飛び散っ

た血までは処理しきれなかったらしい。

「おーおー」

写真で見ていたので、さすがに衝撃はない。とはいえ、思い出して、少し気分が悪くなる。

レナは平然としていた。スプラッタ系には強いのである。彼女の場合、感動するのも面倒なのかもしれないが。

適当な警官を呼び止めて、不審人物について聞いてみた。が、特に無いらしい。犯人は現場に戻る、と昔ドラマで見たが、さすがに警官たむろする現場には戻ってくるはずもないか。

ショッピングモールに来るまでに周囲を窺ってみたが、生憎と収穫は無かった。近場には、すぐオフィス街やマンション群などがある。そこに逃げ込まれていたら面倒だ。

とりあえず、というつもりで、力也はレナと周囲をぶらついてみた。まだ午前中。行きかう人はビジネスマンが多い。一応、近くにマンションなども建っているのだが、事件があったからだろう、人通りは少ない。

一時間ほど歩いたところで、レナがめんどくさいを連呼し始めた。仕方無しに、オフィスビル一階にあった喫茶店に入る。

力也はアイスコーヒー。レナはオレンジジュースを注文した。もちろん、先程のタクシー含め、経費で落す。

「まだやるの？」

眠たそうなレナ。視線には、少しばかり棘が混じり始めた。気持ち分かるが、力也にはいかんともしがたい。これも命令である。

「お仕事だからな」

「……めんどくさい」

「そう言うなって」

「いつも、こんなことしてるの？」

「ああ、たまには、なあ」

個人能力対策室の人手不足は深刻である。

昨日のように、“目標”が捕捉できている場合の方が少ない。む

しろ、力也は足で稼いだ星の方が多いくらいだ。

個人能力対策室の人手不足は、特に能力者の不足が深刻である。増やすには、国連の許可が必要だ。あいにくと、日本はまだ過去の罪を拭いきれていない。

それが、今日の犯罪大国ぶりを助長しているのであるが、よその国も、自国の治安維持で手一杯だ。こっちのことなど、考えてはくれない。

”目標”を探すための探知能力を持った者が増えてくれれば、力也としてもありがたい。苦ではないとはいえ、足で稼ぐよりも、能力者による探知の方が効率的なのは分かっている。

現在、日本の個人能力対策室が持つ探知能力者は一人きり。とある少女なのだが、毎日悲鳴を上げながら仕事をしている。その様を見ている力也としては、何重もの意味で増員を期待したいところだ。とはいえ、日本のことを認めさせるには能力犯罪の功績をさらに上げるしかなく、と堂々巡りである。

「めんどくさ……」

レナの言葉は耳に痛い。いくら東郷の娘とはいえ、レナの右腕にはきちんと腕輪がある。協力を求めるのは心苦しい。

なんとか早々に解決したいものではあるが、

「どうやって探すかねえ」

こと、これに尽きる。周囲のビル群に”目標”が隠れていたとしたら、レナというエサを使う意味も薄い。

煮詰まってきたので、力也は話題を変えた。

「なあ、どんな奴だった？」

「ん？」

「お前が見た”目標”だよ。そういや、男か女かすら聞いてなかったな」

「女」

「ほー」

「……」

「って、他にも教えてくれよ」

オレンジジュースを飲みながら黙りこくるレナに、突っ込みを一つ。レナはため息を前置きに、話し始めた。

「どこにでもいそうな人」

「どこにでもねえ。って、それじゃ特徴にならねえな」

「なんか、イライラしてるみたいだった。殺された人と、なんか言い合ってた」

「ふうん。知り合いとかだったのかな。そんな時にはもう、腕輪してなかったか？」

「知らない。見てなかったから。私が見たのは、なんか、手でざくざく切ってたところだけ」

「……一番えぐいとこ見てたのかよ」

「最初は、わからなかったから」

めんどくさがりやな友人の表情は読みづらい。が、浮かない顔をしてるなくらいには分かる。

早く解放してやりたいと思う反面で、相手の能力が分かったのは収穫である。正直、どうやったのかを聞くのは、知った顔といえど、ためらわれたからだ。

人が解体される光景なんぞ、思い出させたくもない。力也としては、相手を見つけた直後にぶん殴るくらいにしか考えていなかったが、

「手か、指かで、触ったものを切るってか。便利だな」

軽口半分に返すと、レナの表情がいくらか和らいだ。

そこへ、割ってはいるかのように、電話がなった。力也の携帯だ。仕事についてかと思い、相手も確認せずにすぐに出る。

『はい』

通話口から聞こえたのは、東郷の鉛のような声ではなかった。

「おう、マリナか」

『そうよ。誰だと思ったの。私の携帯からかけてんのに』

「ああ、わりい。仕事かと思って、相手、見てなかった」

『つたく、仕事熱心ねえ』

相手は、少し前に考えていた、探知能力持ちの同僚だった。

草分マリナ。力也と同年齢の、高校二年生。しかして、万年職場詰めの哀れな仕事仲間である。

力也が外を回るしかないのに対し、マリナは個人能力の使用を感じ取れるという一風変わった、調査に秀でた能力を持ったため、いつも職場に押し込まれている。

「そういうお前はどうしたよ、休憩か？」

さっぱりとしたショートカットと、気の強そうな瞳を思い出して、力也は返す。対してマリナは棘を含んだ口調で、

『そうよ。やーっと仕事に一段落ついたの。そっちは？』

「ああ、聞いてつか知らないけど、こっちも仕事中。まあ、今はコーヒー飲んでるけど」

『優雅ね。殺したくなるわ』

明るくきっぱりといわれた。

「いや、そうは言うけどな、こっちも歩きっぱなしでさ」

『アンタなら一ヶ月歩きどおしても疲れないでしょうが』

「いや、さすがにそれはないと思う。……やったことないけど」

『時間の無駄だからやらないでよね。っと、そうそう、時間の無駄といえよ』

思い出したように、マリナが切り出す。

『ひ、暇つぶしに、アンタの案件、調べて見たんだけど、聞く？』

「マジか？ そりゃ助かる！」

『そ、そう。ちょうど手元にあったし、別にどうって意味じゃないんだけど』

「ああ、でもありがてえ。相方と歩きっぱなしでよ。俺はいいんだけど、あっちがな。疲れるし」

『……相方？』

「ああ、事件の第一発見者。室長の……」

『……娘さん？』

「そうそう。あれ、知ってんの？」

『たまにアンタが話す、ご近所さん？』

「そう、それ」

答え返すと、なぜか沈黙がやってきた。気のせいかな、通話口からプレッシャーを感じる。

「ど、どうした？」

聞き返すと、

『アタシが必死に仕事してるのに、アンタはデートかい！』

「おいおい、ちげーよ。仕事だよこっちも！」

『うっさい馬鹿、死ね！』

「仕事だって言ってるんだろ！　なんでそれがデートになるよ！？」

でえと？　と首を傾げるレナだったが、力也は気にしていられない。いきなりキレだした通話相手の意図が読めなかった。

『ホント？　仕事？　仕事ね？　ビジネスライクな話しかしてないわね？』

「ああ、そうだよ！　今だって、”目標”について話してたよ」

『オーライ……。じゃあ、アタシもビジネスライクにいくわよ』

「……いや、言われなくても分かっているけど」

『うるさい、死ね！　ああ、じゃなくて、アンタの”目標”だけど、やっぱりK区のTにいる。んで、ついさっき、反応あった』

「……マジか。で、詳しい場所は分かるか？」

一気に力也の頭が冷めた。マリナが言うからではないが、頭がすぐに仕事用に切り替わる。

『アンタ、今、力使ってみて』

「おう」

『……オーケー、って、近いわよ？　同じビルにいる！』

「なに？」

力也が声を上げるのと、

「あ、あれ」

レナもまた、声を上げた。

すぐさま振り向く。すると、視線の先に、喫茶店の入り口に女が見えた。俯き、表情は見えないが、ビジネスマンらしき男と話している。

「サンキュー、マリナ！」

『ちょ！ 貸しだからねコレ！ ああん、もうっ……』

携帯をすぐさま折りたたみ、力也は椅子を蹴り、飛び出した。

力也が首輪を弾くのと、女が腕を振上げるのは同時だった。マズイと思うが早いか、力也は、女の前に立っていたビジネスマンを、「わりい！」

飛び蹴りにてふっ飛ばし、女の一撃を足にて受けた。

火花が散り、女の腕が弾かれる。個人能力対策室・研究開発所の優秀さに、力也は内心で感謝する。

つい、考えなしに動いてしまったが、ともすれば足をやられていたことに内心冷や汗しながら、力也は名乗る。

「APPだ。一般人はすぐにどけ！」

蹴りをくらったビジネスマンが、いの一番に逃げた。一応、蹴りには能力を使っていなかったので、大した怪我もしなかったらしい。

「え、APP!？」

「そういうこった、犯罪者。大人しくすれば、手荒にはしないぞてやるぞ」

「じゃ、邪魔しないでよ！ 私はあいつを、あいつを！」

女が、ビジネスマンの逃げた先に走ろうとするのを、力也が先んじて制す。単純な体力と体術になら、力也に分があると、すぐに分かった。

女は、三十代に入るか入らないかくらいなの、レナの言ったとおり、どこにでもいそうな女性だった。

ただ一つ、そのどす黒い瞳を除いては。

ちらりと女の右腕を見やると、長い袖で腕輪があるであろう部分を隠していた。ファッションとしてはよくあるものだが、袖口が赤黒く染まっている。

「ここにくるまでに、またやりやがったな……?」

「あの人が悪いのよ! 私以外に、他に女を!」

「ああ、そういう理由かよ。どういう理由でもいいけどな!」

グローブをはめ、力也は構える。女は、能力を使える以外は一般人と変わらないようだ。

痴情のもつれやらは知ったことではない。力也は、忠実に己の職務を果たす。

「腕の一本二本は引きちぎってもいいっていわれててね。大人しくしねえなら、てめえがバラしたやつらみてえにしてやってもいいけどよ」

「ひ、ひいっ!」

女が腕を振るう、それだけで、風きり音がすごい。単純に物を切断する以上の能力がありそうだが、使い手が一般人なら、制するには容易い。

力也が脅すと、女はすぐに大人しくなった。まだぶつぶつと何か言っていたが、無視する。

ポケットから、昨晚と同じプレートを取り出し、女の腕にあてがおうとすると、女は急に、狂ったように腕を振り回した。

「つぶねえ!」

思わず、プレートを取り落とす。女の指先が触れると、それは真つ二つに切れてしまった。

「ど、どうせ死刑になるなら、せめてアイツを殺してから!」

力也自身も、頬を裂かれた。まるで、紙で切ったような痛みが走る。

女は走り出していた。力也も負けじと、追いかける。

二歩でトップスピード。三步目で、スライディングして、女の足を払った。そのまま押し倒し、予備のプレートを女の腕にあてがう。今度は上手くいった。路面をがりがりと裂いていた女の指が、空しく地面を掻くだけになる。

「離して、離してよお……」

泣きながら懇願されても、力也は離すきなどない。捕まえた時点で、話す気すら失せている。

すぐさま東郷へと連絡を入れた。

『まさか、一日で片付けるとはね』

「運が良かったんですよ」

『よくやってくれた。そして、ありがとう』

「ご近所さんのよしみってことで」

駆け寄ってきたレナに手を振り無事を示し、力也は大きく息を吐いた。

回収班に女を引き渡すと、すぐにレナと別れた。力也には報告があったからだ。

事務所に顔を出すと、東郷に労をねぎらわれ、マリナからは蹴りを食らった。後者は納得がいかなかったが、恩義があるので反撃はしなかった。

力也が家に帰れたのは、諸所の手続きを終えて、夜の九時を回った頃だった。

政府管理の特別なマンションだ。入り口には警備員。防犯設備もカメラ始め、各種センサー装備の豪勢な代物である。

管理人に軽く挨拶を済ませて、自宅へ。

「あ、おかえり！」

一番に出迎えてくれたのは、弟の静馬だった。そして、

「おかえり、力也」

父の、原也だ。

「ただいま。飯、ある？」

「ああ、あるぞ。今用意するからな、待っている」

「いいって、親父、自分でやるよ」

「大丈夫だ、今日は調子がいいからな」

原也は力也を手で制し、キッチンへと歩いていった。静馬は、力也の後に引っ付き、土産話をねだってくる。

適当に返事をしつつ、父の用意してくれた食事を済ませ、学校の宿題に手をつけ、すぐに諦めてベッドに身を投げた。

忘れぬよう、携帯を充電しつつ、力也はあっさりと睡魔に屈し、眠りに落ちた。

翌日、目覚ましの五分前に、仕事の電話で起こされるまで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4679y/>

P & P（仮題）

2011年11月17日17時40分発行